

労働政策フォーラム (2024.3.6)

両親の帰宅時間が子どもの成績や母親の両立葛藤に与える影響 ——「仕事と教育の両立」問題の実証的研究——

東京大学男女共同参画室

特任助教

中野 円佳



自己紹介

- ◆ 2007年4月、東京大学教育学部卒、日本経済新聞社入社。金融機関、上場企業の財務や経営、厚生労働政策→「エコノ探偵団」「女性面」などを執筆。
- ◆ 育休中に立命館大学大学院先端総合学術研究科に入学。2014年9月、同研究科に提出した修士論文を『**「育休世代」のジレンマ ～女性活用はなぜ失敗するのか**』として出版。
- ◆ 2015年4月よりフリージャーナリスト、2017年4月よりシンガポール在住。東京大学大学院教育学研究科博士課程在籍中。2022年4月より東京大学男女共同参画室特任研究員、23年4月より特任助教。
- ◆ 2018年『**上司の「いじり」が許せない**』（講談社）、東洋経済オンライン連載の「育休世代VS専業主婦前提社会」が東洋経済オンラインアワード2018「ジャーナリズム賞」に。2019年6月に『**なぜ共働きも専業もしんどいのか**』、**2023年1月『教育大国シンガポール』を上梓。**

中野円佳

教育大国シンガポール
日本は何を学べるか



光文社新書

はじめに

本発表は「2021 年度参加者公募型二次分析研究会「子どもの生活と学びに関する親子調査」（パネル調査）を用いた親子の成長にかかわる要因の二次分析研究成果報告書」をもとにしたものです。分析の詳しい内容は報告書をご覧ください。

<https://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/pdf/RPS080.pdf>

・二次分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「子どもの生活と学びに関する親子調査Wave1~4,2015-2019」（ベネッセ教育総合研究所）の個票データの提供を受けました。また、二次分析研究会の皆様にはアドバイスやコメントを頂きました。

問題設定

- 子育て世代の課題は「仕事と育児の両立」から「**仕事と教育の両立**」問題へ

- **「教育する家族」**

- 親こそが子どもの教育の責任者であるとの観念のもとに主に母親が「パーフェクトチャイルド」を育てようとする「教育する家族」の大衆化が進んでいる（広田1999）
- ころまで親がケア（本田2010）⇔増える不登校児

- **学校外教育の利用は親の負担を軽減しない**

- 進学塾通塾時間が専業主婦家庭で多い（平尾2004）→今や昔？現在の中学受験。
- ハイパー・メリトクラシー：習い事など外での活動が増えるにつれ切があり時間に追われる領域や親自身が決定権を持たない領域、予測不可能な出来事への対応などにおいて母の負担が大きい（Lareau and Weininger 2008）

- **教育役割が女性のライフコースに及ぼす影響**

- 中国（宮坂2007）や韓国（柳2021）で、アジアでの高学歴女性の主婦化が指摘されている
- 家事・乳幼児の養育は外注しても、教育は外注しない／送迎に時間をかけるシンガポールの親たち（中野2023）

- フルタイムで働く親は、「仕事と教育の両立」問題にどのように直面しているか？

先行研究

- 学力規定要因として家庭の属性・環境は研究が蓄積されてきたが……
 - **出身階層と学力の関係**：量的研究において親の学歴など生まれた家庭の環境によって子どもが到達する学歴の格差が存在する（苅谷 2001, 松岡 2019）, 親の「教育期待」（荒巻 2016）や親族やパーソナルネットワークの学歴や学歴志向が親の学歴志向に影響すること（荒巻 2019）, 出身階層により教育期待や育児スタイルが異なることなどが質的研究でも示されてきた（Lareau 2003, 本田 2005, 伊佐 2020など）
 - **働き方への言及**：母親の雇用形態を専門職・管理職とそれ以外について前者が学校外教育を促進する上での「時間的制約効果」としてネガティブな影響（Jung & Lee 2010）, 母親のパートタイム・フルタイムを代理指標として子どもへの影響（Kan 2012）。ただし, 職種や雇用形態は必ずしも家にいて子どもにかける時間と一致しない。
 - **夫婦の教育役割分担**：「教育する父」（多賀 2011）や夫婦協働で「教育時間」を捻出する難関大卒夫婦（額賀・藤田 2021）の存在が指摘されているが, 量的調査で父親側に「時間制約効果」が現れるかは検討されてこなかった。学校外教育の活用や祖父母の支援, 夫婦の役割分担はこれを補うことができるのだろうか。
- : 夫婦の帰宅時間から見た時間的制約は, 子の成績に影響を与えているのだろうか。

問い

両親の帰宅時間は「仕事と教育の両立」問題にどのように影響しているか？

- **教育**：親のかかわりと子どもの成績や自己肯定感への影響

これまでの調査で、親の帰宅時間はほとんど考慮に入られていない。両親の帰宅時間が遅い場合、どのように子どもとかかわる時間を捻出しているのか。祖父母や学校外教育は代替となるのか？

- **仕事**：母親自身の就労への影響

子どもと過ごすべきと考える時間が溜まる「時間負債」（ホックシールド1997＝2012）は量的調査で確認されるか？教育熱心だとより悩みは深くなるのか？夫婦で分担ができていれば悩みは減るか？

仮説

- **教育**：両親の帰宅時間を考慮にいたした子どもへの影響

- 1-1. 両親の帰宅時間が遅いと、親子のかかわりが減る
- 1-2. 両親の帰宅時間が遅いと、親子のかかわりが減る結果、子どもの成績や自己肯定感に悪影響がある
- 1-3. 両親の帰宅時間とは独立に、他の育児資源を活用できれば、子どもの成績や自己肯定感に悪影響はない
- 1-4. 両親の帰宅時間とは独立に、親の教育期待が高ければ、子どもの成績や自己肯定感に悪影響はない

- **仕事**：両親の帰宅時間を考慮に入れた母親の両立悩みへの影響

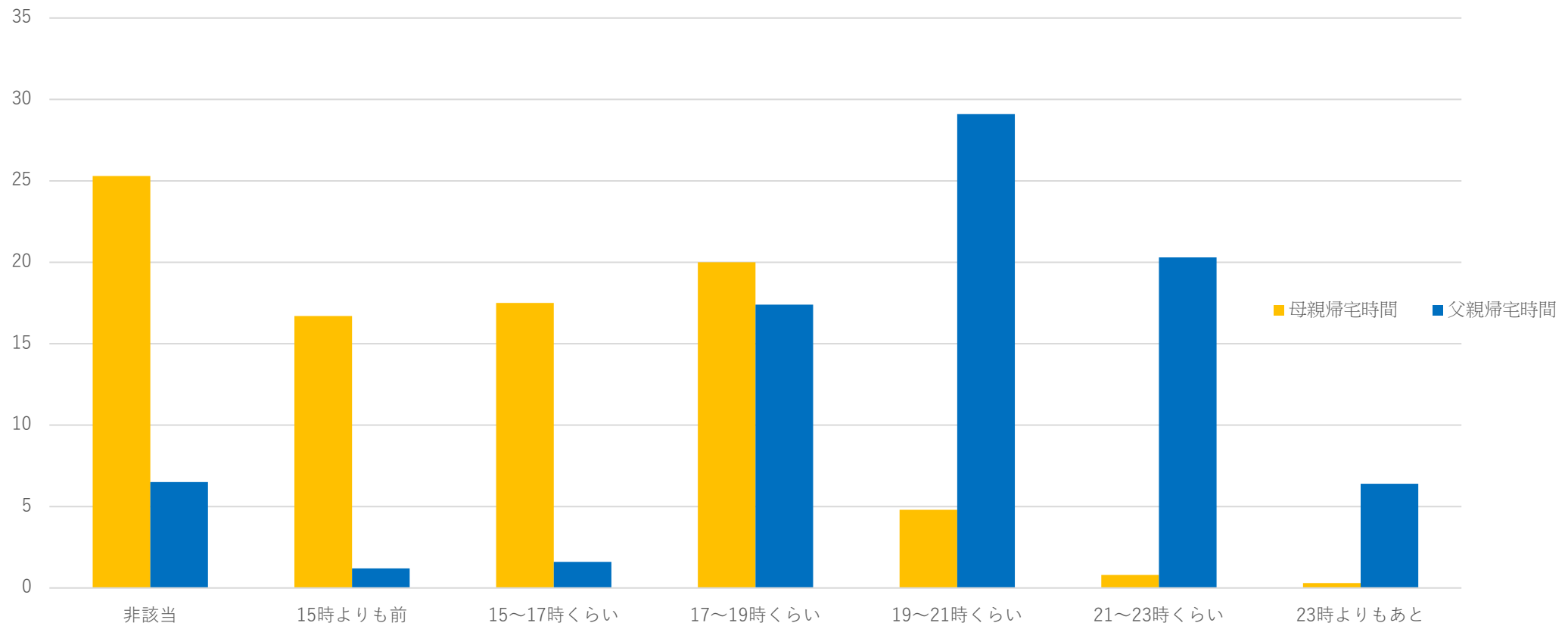
- 2-1. 帰宅時間が遅いと、「仕事と家庭の両立」の悩みを抱えやすい
- 2-2. 親子のかかわりが持てていないと、「仕事と家庭の両立」の悩みを抱えやすい
- 2-3. 教育熱心であると、「仕事と家庭の両立」の悩みを抱えやすい
- 2-4. 他の育児資源を活用できれば、「仕事と家庭の両立」の悩みは抱えにくい

使用データ（分析1：教育）

- 「子どもの生活と学びに関する親子調査 Wave2,2016」(ベネッセ教育研究所)
親のかかわりが重要とされる小学生のうち、子どもの成績が明らかな小4~小6を対象
- 使用する変数：
 - 母帰宅時間（基準：専業主婦） 15時前／15~17時／17~19時／19時以降
 - 子 お父さんやお母さんは「勉強のやり方を教えてくれる」（とても&あてはまる）
 - 成績上位ダミー
- 統制変数
 - 男子ダミー, 子ども人数
 - 収入（基準：400万以下） 高収入ダミー／中収入ダミー
 - 母学歴（基準：高卒以下） 母四大卒以上ダミー／母専門・短大ダミー
 - 通塾あり／母パートダミー／「あなたの親やあなたの配偶者の親に、どれくらい家事や子育てを手伝ってもらっていますか」祖父母援助／親子のかかわり項目（子ども回答）

両親の帰宅時間

両親の仕事がある日の帰宅時間



雇用形態と帰宅時間の関係

パートタイムは8割が17時より前に帰宅 フルタイムは8割が17時以降に帰宅
 ただし、雇用形態が帰宅時間分類に完全に一致するわけではない

			母帰宅時間				合計
			15時前	15-17時	17-19時	19時以降	
母親の雇用 形態	フルタイム	度数	14	94	680	210	998
		%	1.4%	9.4%	68.1%	21.0%	100.0%
	パートタイ ム	度数	736	690	217	51	1694
		%	43.4%	40.7%	12.8%	3.0%	100.0%
合計		度数	750	784	897	261	2692
		%	27.9%	29.1%	33.3%	9.7%	100.0%

分析1－1

親子のかかわり（順序ロジット）

仮説1－1：両親の帰宅時間が遅いと、親子のかかわりが減る

分析結果：

父親の帰宅時間が遅いと母親との会話量が増える。親子のかかわりには帰宅時間によって減少しているわけではない（かえって増える項目もある）

子ども成績（3段階）決定要因（順序ロジット）

仮説1-2：両親の帰宅時間が遅いと、親子のかかわりが減る結果、子どもの成績に悪影響がある

仮説1-3：両親の帰宅時間とは独立に、他の育児資源を活用できれば、子どもの成績に悪影響はない

仮説1-4：両親の帰宅時間とは独立に、親の教育期待が高ければ、子どもの成績に悪影響はない

分析結果：

モデル1：男子・子どもの数・学歴以外に 母帰宅時間が17時以降／父帰宅時間が21時以降だと成績悪くなる

モデル2：親子のかかわりは成績に好影響を与えるが、それとは独立して帰宅時間の影響は残る

モデル3：祖父母は効果なし、塾は成績に好影響を与えるが、それとは独立して帰宅時間の影響は残る

モデル4：教育期待が高く家庭での学習時間が長いと成績に好影響があり、帰宅時間の影響が弱まる

分析1－2, 3, 4

自分の良いところを言える（4段階）決定要因
（順序ロジット）

仮説1-2：両親の帰宅時間が遅いと、親子のかかわりが減る結果、子どもの自己肯定感に悪影響がある

仮説1-3：両親の帰宅時間とは独立に、他の育児資源を活用できれば、子どもの自己肯定感に悪影響はない

仮説1-4：両親の帰宅時間とは独立に、親の教育期待が高ければ、子どもの自己肯定感に悪影響はない

分析結果：

モデル1：きょうだいの数がマイナス、母親学歴がプラスの影響をもたらし、両親の帰宅時間は効果なし

モデル2：親子のかかわりは自己肯定感に好影響を与える

モデル3：祖父母や父親が子と過ごす時間は自己肯定感に好影響を与える

モデル4：教育期待や成績のよさが自己肯定感に好影響を与える

使用データ（分析2：仕事）

- 「子どもの生活と学びに関する親子調査 Wave2,2016」 小4~小6 ※専業主婦層除く
- 使用する変数：
 - 母帰宅時間（基準：15時前） 15~17時／17~19時／19時以降
 - 母の「悩みや気がかりがありますか」：「仕事と家庭の両立」を選択
- 統制変数
 - 男子ダミー，子ども人数
 - 収入（基準：400万以下） 高収入ダミー／中収入ダミー
 - 母学歴（基準：高卒以下） 母四大卒以上ダミー／母専門・短大ダミー
 - 通塾あり／父子過ごす時間／「あなたの親やあなたの配偶者の親に，どれくらい家事や子育てを手伝ってもらっていますか」祖父母支援
 - 成績上位・中位ダミー

分析2 「仕事と家庭の両立」悩み選択 の決定要因（二項ロジット）

- 仮説2-1.** 帰宅時間が遅いと、「仕事と家庭の両立」の悩みを抱えやすい
- 仮説2-2.** 親子のかかわりが持てないと「仕事と家庭の両立」の悩みを抱えやすい
- 仮説2-3.** 教育熱心であると、「仕事と家庭の両立」の悩みを抱えやすい
- 仮説2-4.** 他の育児資源を活用できれば「仕事と家庭の両立」の悩みは抱えにくい

分析結果：

モデル1：両立の悩みは、子どもの数、母帰宅時間が17時以降、父帰宅時間19時以降で抱えやすく、フルタイムに対してパートタイムだと抱えにくい。

モデル2：親子のかかわりは効果がなく、母親自身が趣味やスポーツの時間を取れていると悩みを抱えにくい。

モデル3：子の成績や教育期待の高さと悩みとの関連は有意に出なかったが、「競争に負けた人が幸せになれないのは仕方ない」と考えていると悩みを抱えやすい。

モデル4：祖父母の月1～3回支援は悩みを抱えやすくし、父子の過ごす時間が長いと悩みを抱えにくい

分析結果まとめ

• 教育：親の自宅時間子どもの学力への影響

1-1. 「両親の帰宅時間が遅いと、親子のかかわりが減る」については、帰宅時間が遅い方がかかわりがみられることもあり、親子のかかわりと帰宅時間の明確な関係性は見いだせなかった。

1-2. 「両親の帰宅時間が遅いと、親子のかかわりが減る結果、子どもの成績や自己肯定感に悪影響がある」については両親の帰宅時間が遅いと、子どもの成績に悪影響があることは分かったものの、親子のかかわりとは独立していることが分かった。また、自己肯定感に両親の帰宅時間が影響を及ぼしておらず、親子のかかわりは自己肯定感を高めていることが分かった。

1-3. 「両親の帰宅時間とは独立に、他の育児資源を活用できれば、子どもの成績や自己肯定感に悪影響はない」については、成績に対しては通塾が効果を持つものの、祖父母の支援は効果がなく、外部資源は帰宅時間の悪影響を打ち消さないことが分かった。

1-4. 「両親の帰宅時間とは独立に、親の教育期待が高ければ、子どもの成績や自己肯定感に悪影響はない」については、教育期待や自己責任意識があり、家庭での学習時間が長いことは成績にポジティブに働いており、帰宅時間の影響を弱めた。自己肯定感に対しては帰宅時間は関連がなかったが、祖父母の関わりや父親と過ごす時間は効果の多さが有意に効果を持つ。

• 仕事：親の両立悩みへの影響

2-1「帰宅時間が遅いと、「仕事と家庭の両立」の悩みを抱えやすい」は仮説が支持された。

2-2. 「親子のかかわりが持っていないと、「仕事と家庭の両立」の悩みを抱えやすい」については、親子のかかわり変数の効果はなかった。趣味やスポーツの時間を取れている場合は悩みが軽減する効果があったが、帰宅時間のネガティブ効果を打ち消すようなものではなかった。

2-3「教育熱心であると、「仕事と家庭の両立」の悩みを抱えやすい」は必ずしも当てはまらず、教育意識よりも自己責任意識が悩みを深めることが分かった。

2-4「他の育児資源を活用できれば、「仕事と家庭の両立」の悩みは抱えにくい」については父親の関与が悩みを減らしていることが分かった。

結論

—帰宅時間は、子どもの成績にネガティブな影響を与えており、親子のかかわりは成績に好影響を与えるものの、帰宅時間とは独立であった。他方で、子どもの自己肯定感には両親の帰宅時間は関係がなく、親子のかかわりや母親以外の大人の関与がポジティブな効果をもたらす。

—成績に対する帰宅時間の影響は外部資源の活用で解消できるものではないように見えるが、教育期待が高く、家庭で学習時間を確保できている場合は帰宅時間の遅さの効果を減らすことができる。ただし、「競争で負けたら幸せになれないのは仕方ない」という自己責任論によって子どもが学習時間に駆り立てられることは健全とは言えず、自己責任論は母親の葛藤をももたらしていた。

—母親の葛藤について、帰宅時間が遅いことは両立の悩みを抱えやすくすることが確認された。「時間負債」は多くの母の肩にのしかかっている可能性がある。ただし、必ずしも子どもの教育の状況は影響を与えておらず、「教育と仕事の両立」問題に母親たちが教育面から直面しているとは言えない。

：子どもの成績を高めるうえでも、母の両立悩みを軽減する上でも、外部資源の力を活用すれば簡単に解消される問題でもなく、夫婦ともに帰宅できる時間を早める働き方改革が重要となってくるだろう。

ただし、最後に教育格差の視点を付け加えれば、夫婦双方が教育にかかわることで問題を解決しようとする施策はパワーカップルとそうではないカップルの家庭内教育力の格差を生むため、階層の再生産は助長してしまう懸念がある。

時間帯についての問題提起

- 親の仕事の特性・子供の特性、その組み合わせにより対応が非常に困難になってしまう
 - On Callへの対応／シフト制の仕事／リモートワーク可能かどうか
 - 学齢期特有の問題（長期休み／学習フォロー）
 - 支援学級や支援学校「お母さんの付き添い」を前提とされる仕組み
 - いじめ／子ども同士のトラブル／不登校などへの対応
- 都心の中学受験熱
 - 早期化／塾主導のルール／生活リズム
 - むしろ経済面から専業主婦家庭は受験回避の事例も
 - 偏差値競争による自己肯定感の問題

参考文献

- 荒巻草平, 2016, 『学歴の階層差はなぜ生まれるか』 勁草書房
- 荒巻草平, 2019, 『教育格差のかくれた背景：親のパーソナルネットワークと学歴志向』 勁草書房.
- Hashimoto, H. S., 2008, “Housewifization And Changes In Women’s Life Course In Bangkok,” Ochiai,E. and Molony,B., Asia's New Mothers: Crafting gender roles and childcare networks in East and Southeast Asian societies, Folkestone: Global Oriental,110-128.
- 平尾桂子, 2004, 「家族の教育戦略と母親の就労——進学塾通塾時間を中心に」 本田由紀編 『女性の就業と親子関係——母親たちの階層戦略』 勁草書房, 97-113.
- 広田照幸,1999, 『日本人のしつけは衰退したか——「教育する家族」のゆくえ』 講談社.
- Hochschild, A.R., 1997, The Time Bind: When Work Becomes Home and Home Becomes Work, New York: : Metropolitan Books (アーリー・ラッセル・ホックシールド著, 坂口緑・中野聡子・向角道代訳,2015, 『タイム・バインド《時間の板挟み状態》働く母親のワークライフバランス—仕事・家庭・子どもをめぐる真実』 明石書店)
- 本田由紀,2005, 「子どもというリスク」 橘木俊詔編 『現代女性の労働・結婚・子育て』 ミネルヴァ書房, 65-93.
- 本田由紀,2008, 『「家庭教育」の隘路——子育てに強迫される母親たち』 勁草書房.
- 伊佐夏実 (著, 編集) ・志水宏吉 (監修) , 2019, 『学力を支える家族と子育て戦略——就学前後における大都市圏での追跡調査』 明石書店.
- 石田浩,2020, 「家庭の社会経済的環境と子どもの発達」 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所, 『子どもの学びと成長を追う——2万組の親子パネル調査から』 勁草書房, 147-165.
- Jung, J. H., and Kyung H. L., 2010, “The Determinants of Private Tutoring Participation and Attendant Expenditures in Korea,” Asia Pacific Education Review, 2(11): 159–68.
- Kan, M., 2012, “Effects of Maternal Employment on Adolescent Behavior and Academic Outcomes: Evidence from Japanese Micro Data,” CIS Discussion paper series 541, Center for Intergenerational Studies, Institute of Economic Research, Hitotsubashi University.
- 荻谷剛彦, 2001, 『階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲格差社会へ』 有信堂高文社.
- Lareau, A., 2011, Unequal Childhoods: Class, Race, and Family Life, California: University of California Press.
- Lareau, A, and Weininger, E.B., 2008, “Time, Work, and Family Life: Reconceptualizing Gendered Time Patterns through the Case of Children’s Organized Activities1.” Sociological Forum, 23(3): 419–54.
- 松岡亮二, 2019, 『教育格差』 筑摩書房.
- 宮坂靖子, 2007, 「中国の育児——ジェンダーと親族ネットワークを中心に」 落合恵美子,山根真理,宮坂靖子編 『アジアの家族とジェンダー』 勁草書房, 100-120.
- 額賀美紗子・藤田結子, 2021, 「働く母親の時間負債をめぐるジレンマ」 秋田喜代美・東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター (編) 『発達保育実践政策学研究的フロンティア—第二巻』 中央法規出版, 139–67.
- Park, H, Byun,S.-Y., and Kim,K.-K., 2011, “Parental Involvement and Students’ Cognitive Outcomes in Korea: Focusing on Private Tutoring.” Sociology of Education 84 (1): 3–22.
- 柳采延,2021, 『専業主婦という選択——韓国の高学歴既婚女性と階層.』 勁草書房.
- 渡辺秀樹,1999, 「戦後日本の親子関係——養育期の親子関係の質の変遷」 『講座社会学 2』 89–117.
- 米田佑,2019, 「母親のパーソナルネットワークが学校外教育投資に与える影響」 家族社会学研究 31 (2): 123–36.